

ふな塚古墳

(各務原市鵜沼大伊木町)

—各務原の6世紀を語る—

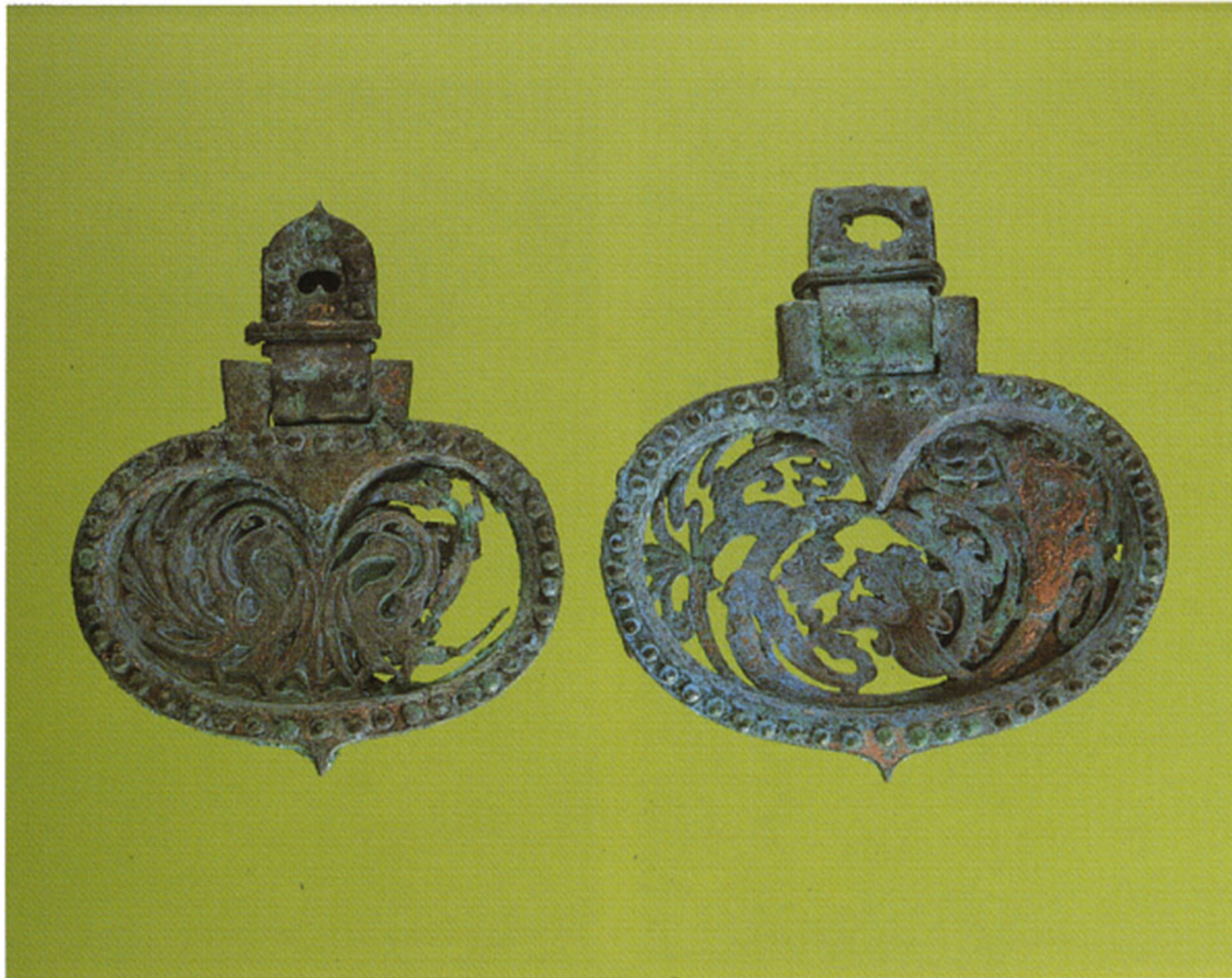
発行 各務原市教育委員会文化課
〒504 岐阜県各務原市那加桜町1-69
TEL(0583)83-1111(代)

ふな塚古墳の発掘

昭和59年4月、それまで雑木林であったふな塚古墳（前方後円墳）の樹木が切り払われ、発掘調査が始まりました。

ふな塚古墳は、大正8年頃から土採り工事によって後円部の西側が削られ始め、昭和の初めまでには、後円部の大部分が削平されてしまいました。この時に、後円部の遺体を安置する施設（横穴式石室）が破壊され、土器類や馬具・武器などの副葬品が出土したと言われていますが、現在では、下図の写真にみられる馬の飾り金具の一種（杏葉）が伝わっているだけで、その他の副葬品や横穴式石室の規模・形態などについてはまったく不明となっています。

今回の発掘調査は、そうした不明な点の多いふな塚古墳について、多くの資料と情報を提供してくれました。まず、それまで前方後円墳とも双円墳とも言われていた古墳の形態が、葺石を有する2段築成の前方後円墳であり、全長は、後円部と前方部の南側が破壊されているために現存する長さでは約42mですが、本来は50mほどの規模であったと考えられます。後円部の直径は、推定で約30m、現存する高さは約4mで



ふな塚古墳出土の杏葉

す。前方部も南側が削られているため、本来の副は不明ですが、現存部で約24mを測り、高さは約5mとなっています。

ところで、大正時代に破壊された後円部の石室とは別に、今回新たに前方部からも横穴式石室が発見されたことから、ふな塚古墳が複数の横穴式石室を有する前方後円墳であったことが判明しました。

発見された石室の規模は、全長約13mを測り、石室の入口である前庭部、通路としての羨道部、遺体を納める玄室から構成されており、玄室の長さが約4mを占め、その幅は約2.5mで高さが約3mを測ります。そして、そこには砂岩製の家形石棺が置かれていました。残念ながら石棺は、石室の天井石が崩れ落ちた時に天井石によって打ち砕かれてしまっていたため、今後の復元作業を待たなければ本来の形態はわかりません。しかし、石棺の規模は長さが約2.4m、副は約1.2mあります。

さて、今回発見された石室のもうひとつの特長は、石室全体が天井部分を除いて川原石でつくられており、しかも、その表面には赤い顔料が塗られていたことです。古墳がつくられた当時、赤い色はとても神聖視されていましたし、このように石室が赤く塗られてるのは岐阜県では2例目の発見ですから、古墳に葬られた人物の性格を考えるうえで重要な特長であると言えます。

今回の発掘調査では主に石室内から、この古墳がつくられた時期を判断するために良好な資料となる何種類かの須恵器や、刀や矢じりなどの鉄製の武器類、そして、ガラス玉などの装身具が出土しました。しかし、石室はすでに何度かの盗掘を受けていたため、古墳の形態や規模からすれば遺物の出土数量は多いとは言えません。



川原石積みによる2段築成の墳丘



前方部の石室と家形石棺

ふな塚古墳は、その墳丘についても特長的な景観としてあげることができます。

ふな塚古墳が立地するのは、各務原台地の南縁がさらに南に突き出す舌状台地であり、眼下には木曾川とその河川敷が広がっています。おそらく、古墳がつくられた当時には、木曾川や対岸の愛知県側からはよく眺めることができたと思われます。このことは、すでにお話ししたように、墳丘のほぼ全体が石で葺かれていたことと考え合わせて、かつてのその姿は、晴れた日には墳丘全体が白く照り輝き、周辺の地域に対して、嫌でもその存在を誇示することになったでしょう。

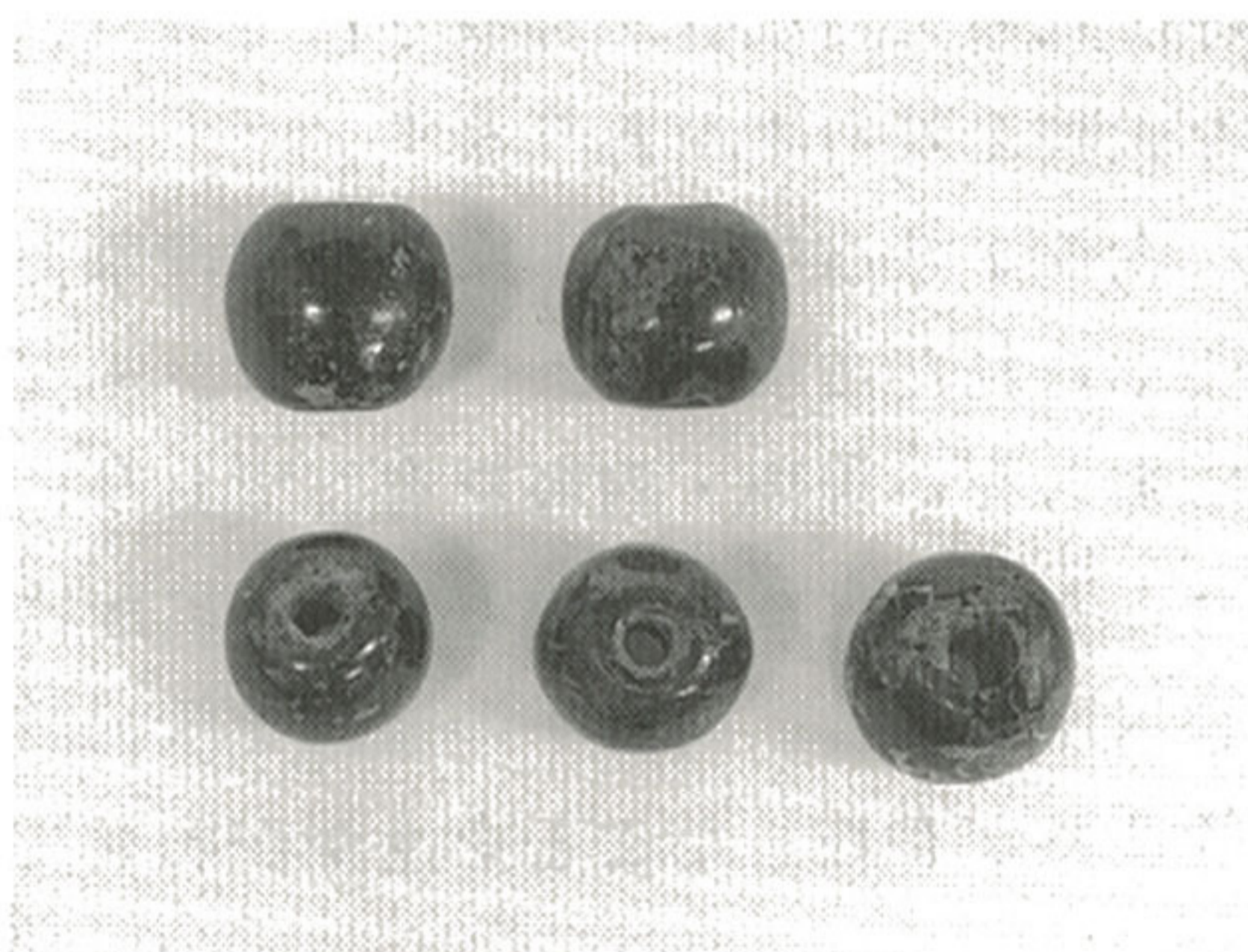
ふな塚古墳の出土遺物

石室内から出土した、当時の食器である須恵器の壺や瓶・杯などである。おそらく、死者への食物を供献するために葬礼の際に副葬されたのであろう。



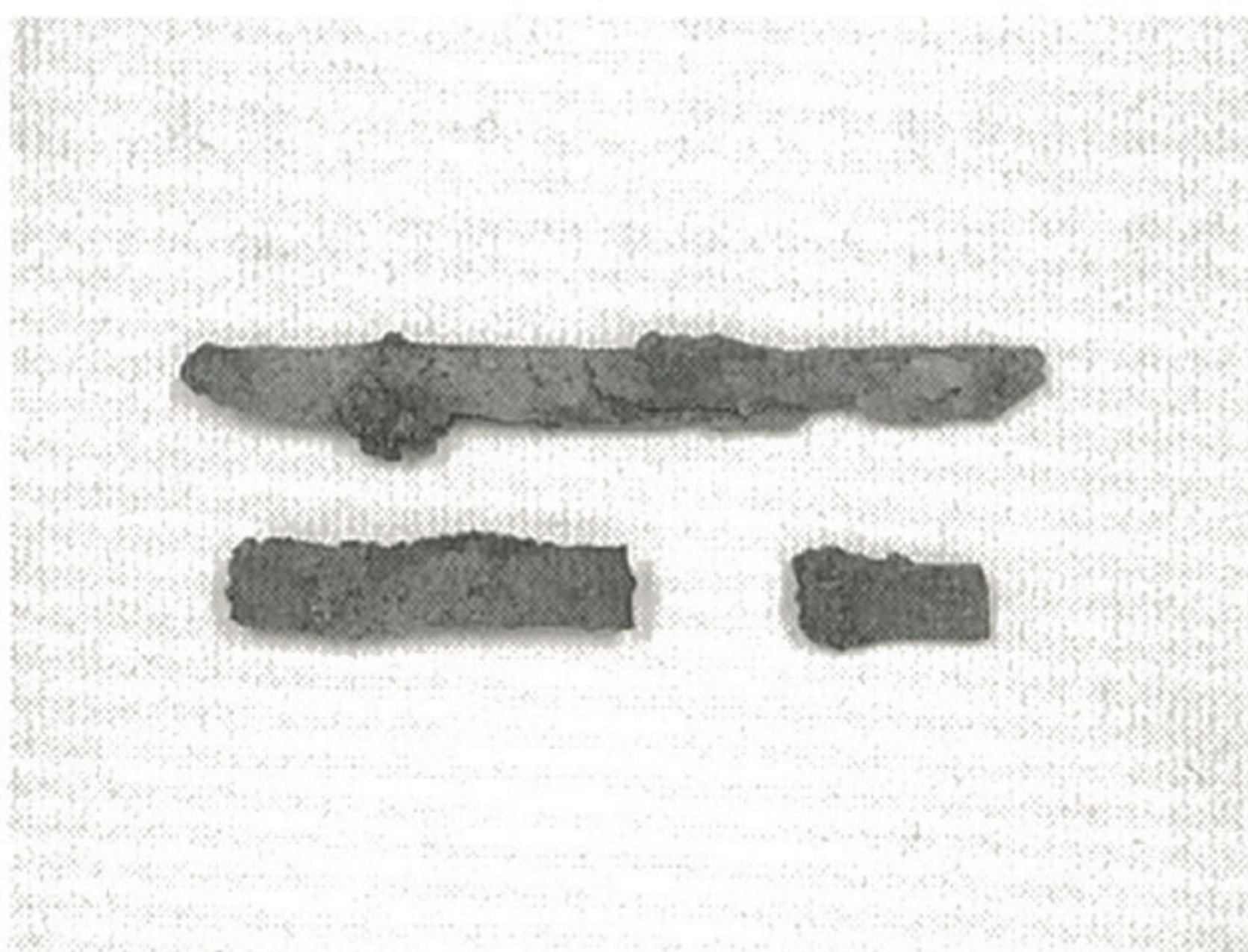
死者の身体を飾ったと思われるガラス製の丸玉である。

大きさは直径約 1.5 cmほどで、深い碧色をしている。このガラス玉は死者の生前には権威の象徴であり、死して後は、その身体を壮麗に飾り立てるためになくってはならないものであった。



鉄製の刀である。

鉄は腐食しやすく、ほとんどさびのために原形が損なわれている。しかし、今とっては見栄えのしないこの金属製品が、当時の社会では豪族の圧倒的な権力の源であり、鉄を保有することは、その地域を支配することでもあった。



ふな塚古墳とその時代

ふな塚古墳がつけられたのは、今から約千五百年ほど前の6世紀後半から7世紀初めにかけての頃です。この時代は、当時の日本にとって大きな変革の時代でもありました。それは、この時期すでに朝鮮半島から仏教が伝わりるとともに、進んだ技術や文化も日本に入っていました。そうした影響を受けて、聖徳太子や蘇我氏にみられる新しい政治の動きが活発化し始め、古代の日本はその姿を大きく変えようとしていたのです。

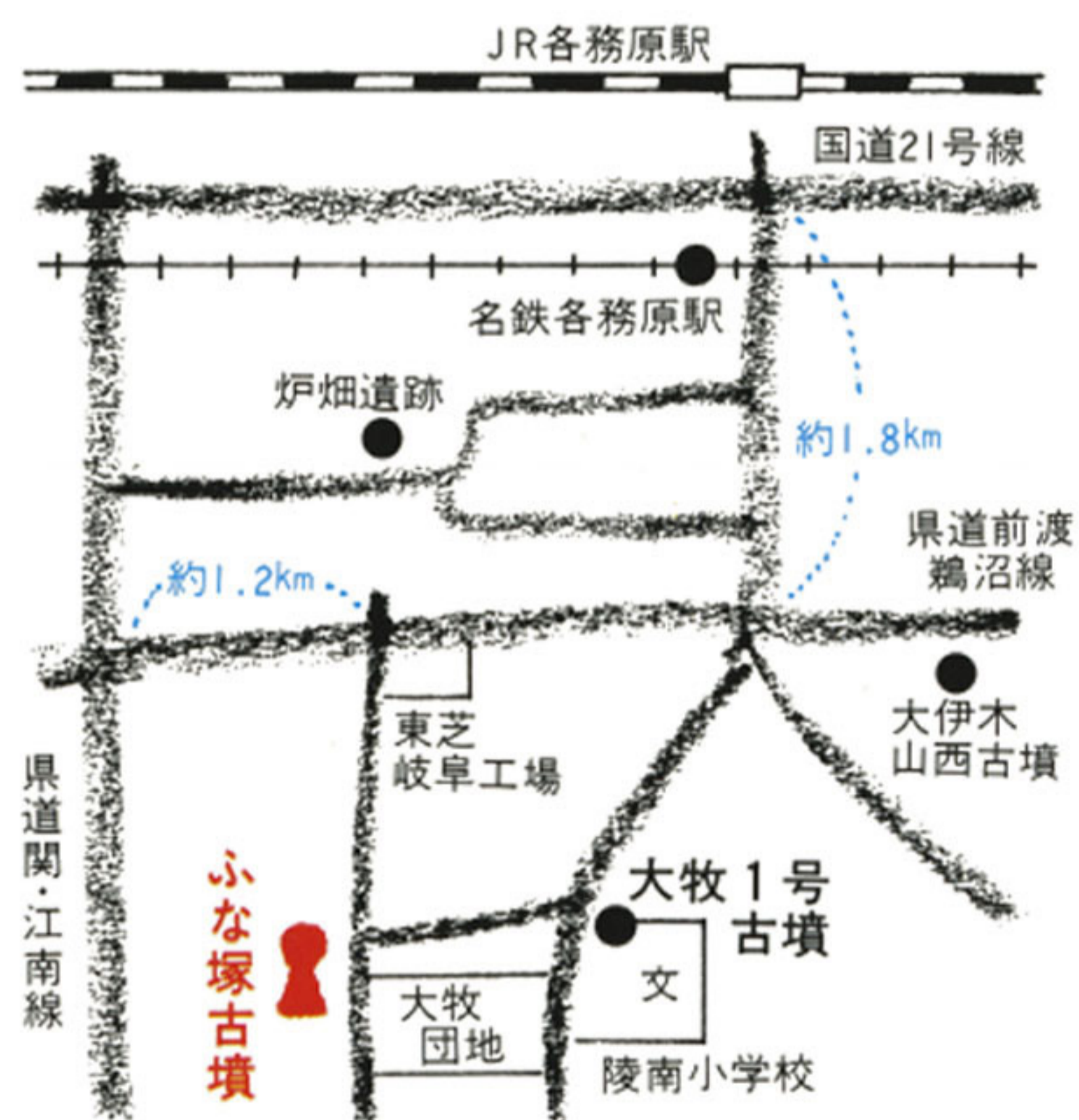
その時代に各務原周辺では、それまで有力な前方後円墳を築いていた鶴沼地区と那加桐野地区で前方後円墳がつけられなくなり、かわって蘇原地区とこの木曾川右岸地域に古墳時代最後の前方後円墳がつけられるようになりました。なかでも、ふな塚古墳が所在する大牧地区には、すでに破壊された古墳を含めると総数80基を越える大牧古墳群と呼ばれる大古墳群が形成されており、そのなかには、昭和57年に発掘調査が行われた大牧1号古墳があります。

大牧1号古墳は、ふな塚古墳の東方約300mに位置し、ふな塚古墳とほぼ同時期につけられた古墳です。こちらにも、ふな塚古墳に劣らない規模・内容を有しており、そうしたことから、6世紀から7世紀にかけての木曾川流域には、何らかの強固な政治的・経済的基盤が存在したことをうかがわせてくれます。

こうしてふな塚古墳は、郷土の貴重な歴史的文化遺産であることから、将来、市民のみなさんの生きた歴史的教育財産として活用されるべく、現状保存されています。



大牧1号古墳石室内の石棺



周辺の遺跡案内図